

# 地方都市における市街地型フットパス導入に向けた課題と方策

内 田 晃

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景

イギリスの田園地帯を発祥とする「フットパス」は、国内で整備されたコースが総延長4,000km以上にも上り、年間約3,500万人の利用者が消費する総額は約1兆2000億円<sup>1)</sup>と、多くの経済効果を産みだす産業として位置づけられている。日本でもその概念が2000年代から伝わり、北海道、山形県、茨城県、熊本県などの自治体でフットパス施策が推進されている。その多くで交流人口獲得に成果が見え始めており、持続可能で普遍的な地域活性化の一手法として注目されている。本学においても、福岡県内の中間市、みやこ町においてフットパス推進の担い手となる活動を行うとともに、現地での活動に基づいたフットパスに関する様々な調査研究<sup>2)3)</sup>を進めてきた。一方で、実践的な活動に踏み込めば踏み込むほど、フットパスコースの策定手法や地域住民との関わり方、より効果的な情報発信のやり方など、様々な課題にも直面している。

### (2) 研究の目的

本研究では大きな観光資源のない地方都市において、フットパス施策が有効な地域活性化の取り組みであるという認識に立ち、まずフットパス発祥の地として先進的な取り組みをしているイギリスの事例から、フットパスの現状、コースづくりや地域住民の関わり方、情報発信手法や現地での案内手法などについて、我が国での適用可能性を念頭に置いた調査を行う。次いで、今年度実践的な取り組みを行ってきた中間市について、これまでの活動の経緯を整理し、抽出された課題を明らかにする。さらに、中間市が具体的な課題として認識している市街地内でのフットパスコースの策定について、その可能性について検証を行い、イギリスの事例研究で得られた知見やこれまでの研究の成果を踏まえた具体的な方策を示すことを目的とする。

## 2. イギリスにおける地域活性化手法

### (1) フットパスの歴史

イギリスには「フットパス」という概念が多く of の市民の間に定着しているが、その多くは「パブリック・フットパス (Public foot path)」と呼ばれており、『公共的な』側面が非常に強い性格を有する。元来、一般の市民が通行できた道路、歩道、公共用地に加えて、個人所有や民間セクターが所有していた牧草地や農地を歩かせてほしいという市民の要望によって、それらの土地が歩く人のために解放され、それが長い年月にわたって『パブリック的な』使われ方をしながら発展してきたものである。

産業革命後、貴族や資本家はいわゆるエンクロージャー運動と呼ばれる土地の囲い込みを行

い、それまでは自由に立ち入ることができた共有地（コモンズ）までも市民から奪うこととなった。自然の中をウォーキングやハイキングすることを嗜好する傾向が強い多くの市民が、自由に歩行することを享受できない現状に不満を持ち、これらの土地の解放を訴え続けた結果、かつて歩くことのできた道を通行することが19世紀に入ってから可能となっていた。その後、1932年には「歩く権利法（Rights of Way Act 1932）」が制定され、誰でも自由に私有地である牧草地、原野、山林などを歩けるようになった。その後、1949年制定の「国立公園アクセス法（The National Parks and Access to the Countryside Act 1949）」、1968年制定の「カントリーサイド法（The Countryside Act 1968）」、さらに2000年制定の「カントリーサイド・歩く権利法（The Countryside and Rights of Way Act 2000）」の制定によって、市民が歩くことのできる空間の分類や位置づけが強化されていった。

## (2) イギリスにおけるフットパスの現状

法律によって歩く権利が確立されていく一方で、政府は長距離コースの作成プログラムを「国立公園アクセス法」が制定された1949年から開始した。その代表的なものはカントリーサイド委員会が公認するナショナルトレイル（National Trail）で、自動車道で言えば国道にあたる。1965年にイングランド北部から中部に到る全長430kmに及ぶペニーウェイ（Pennine Way）が初めて開設されて以後、表1に示すように15のコースが認定され、その総延長は4,000km以上にも及ぶ。ロケーションも図2に示すようにイングランド及びウェールズの広範囲にわたっており、牧草地や山林が広がる内陸部だけでなく、海岸沿いに設定されたコースも多く、中でもサウスウェストコーストパス（South West Coast Path）は全長が1,000kmを超える超長距離コースとなっており、全踏破にかかる標準的な日数は30日間<sup>(1)</sup>とされている。上記の公認トレイルのみならず、この他にも市民が日常的に歩くことのできる地域密着型のコースが地域毎に設定されており、多くの市販の地図に掲載されている。

表1 イギリスにおけるナショナルトレイル

番号	名称	地域	開設年	起点	終点	総延長(km)
1	Pennine Way	North West England	1965年	Kirk Yetholm	Edale	429
2	Cleveland Way	Yorkshire and the Humber	1969年	Helmsley	Filey	177
3	Pembrokeshire Coast Path	Wales	1970年	St Dogmaels	Amroth	300
4	Offa's Dyke Path	West Midlands, Wales	1971年	Chepstow	Prestatyn	285
5	The Ridgeway	South East England	1972年	Ivinghoe Beacon	Overton Hill	139
6	South Downs Way	South East England	1972年	Winchester	Eastbourne	160
7	North Downs Way	South East England	1978年	Farnham	Dover	246
8	South West Coast Path	South West England	1978年	Minehead	Dorset	1,014
9	Yorkshire Wolds Way	Yorkshire and the Humber	1982年	Hessle	Filey	127
10	Peddars Way / Norfolk Coast Path	East of England	1986年	Rushford	Cromer	150
11	Pennine Bridleway	North West England	1995年	Cumbria	Middleton	330
12	Thames Path	London, South East England	1996年	Cricklade	Greenwich	296
13	Glyndŵr's Way	Wales	2000年	Knighton	Welshpool	217
14	Hadrian's Wall Path	North West England	2003年	Wallsend	Bowness-on-Solway	135
15	Cotswold Way	South West England	2007年	Chipping Campden	Bath	164
合計						4,169

出典：ナショナルトレイルウェブサイト(<http://www.nationaltrail.co.uk/>)



出典：ナショナルトレイルウェブサイト (<http://www.nationaltrail.co.uk/>) を基に筆者作成

図1 イギリスにおけるナショナルトレイルの位置図

また、イングランドコーストパス（England Coast Path）と呼ばれる海岸沿いのルートが現在策定中で、既に独立した4コースが開設されており（図1）、今後グレートブリテン島のイングランド地域の海岸沿いに順次拡大していく予定である。

ナショナルトレイルの公式ウェブサイト<sup>5)</sup>では、コースの難易度や公共交通のアクセスなどの詳細な情報が紹介されている。簡単なパンフレットはPDF形式でダウンロードが可能であり、全ルートの地図も掲載されている（図2）。ただし、ウォーカーが実際に歩く時には、市販されている25,000分の1クラスの詳細な地図を利用しているケースが多い。



出典：ナショナルトレイルウェブサイト (<http://www.nationaltrail.co.uk/>)

図2 サウスダウンスウェイ (South Downs Way) の全ルート図

### (3) コースを維持管理する様々な仕掛け

ナショナルトレイルのルート上にある地方自治体では、トレイルの宣伝を行うと共に、ウォーカーが道に迷うことなく円滑に、かつ安全・安心に歩くことができるような様々な配慮をすることが義務づけられている。地図、パンフレット、ガイドブック等による宣伝だけでなく、現地での標識やトイレの整備、ボランティアによる定期的な巡回、コースの安全確保の点検作業、草木の刈り込みなど、行政職員だけでなく地域住民の協力なしでは到底カバーできない内容まで含まれる。

ナショナルトレイルは総延長も長く、多くのウォーカーは複数の日程をかけてコースを移動していくため、アクセスの基本は公共交通機関となっている。イギリスは鉄道が発達しており、駅からのバスネットワークも地方まで確立されている。バスでアクセスした人のために、主要なバス停には地図が整備され、バス停近くには観光インフォメーションがあって、ウォーカーを歓迎している (写真 1、2)。

写真 3 から 6 はナショナルトレイルの一つであるコッツウォルズウェイ (Cotswold Way) の案内標識を示す。コッツウォルズウェイはイングランド西部、ローマ時代の遺跡都市バース (Bath) からチップینگカムデン (Chipping Campden) に到る全長 164km のトレイルで、15 あるコースのうち、最も新しく 2007年に認定された。ロンドンから1~2時間でアクセスでき、

丘陵地帯に牧草地が広がる美しい風景を楽しむ事ができることから、多くの外国人観光客も訪れる人気のコースである。100 マイルに及ぶコースは様々な行政機構に跨っており、それぞれの地域が独自の標識をかかげて、ウォーカーが道に迷わないような配慮がされている。素材や設置場所は様々であるが、ナショナルトレイルのロゴマークと「Public Footpath」という表現は統一されており、来訪者をもてなしている。



写真1 バス停に設置されている案内図



写真2 バス停近くに設置された標識



写真3 木製の標識



写真4 鉄製の標識



写真5 民家の壁に設置された標識



写真6 円形パネルが埋め込まれた標識

また、ウォーカーにとって最も切実な関心事はトイレ問題である。1日平均 20~30km を 6~8 時間かけて歩く人が多く、コース上にトイレは欠かせない。受け入れる側の行政にとっても財政負担は大きく、日本のように公園や駅などに設置されている公共トイレは少ないが、小

規模の集落にもイギリス固有のパブがあることが多く、食事や休憩場所を兼ねてトイレとしての活用がされている。また、図3に示すように、pdf形式で公開されている各ステージのマップには全体のコースと共に観光案内所や駐車場の位置が明記されている。



写真7 行政が整備した公共トイレ



写真8 トイレへの案内標識

Cotswold Way Circular Walks
NATIONAL TRAIL

## 2. Broadway and the Tower

This enchanting walk leads you through the picturesque Cotswold high street of Broadway, along historic tracks and up to the intriguing Broadway Tower with its spectacular views across the Severn Vale into Wales. The perfect chance to taste a little more of all the Cotswolds has to offer.

**Distance:**  
4 miles

**Duration:**  
2½-3 hrs (Without stops)

**Difficulty:**  
Moderate, some steep sections and stiles

**Public transport:**  
No. 606 bus from Cheltenham (See Cotswold Way public transport leaflet, or call Traveline on 0871 200 2233)

**Start/Finish:**  
Grid reference SP096375 (OS Explorer sheet CL45)  
Postcode WR12 7AA

**Refreshments:**  
Numerous cafes/pubs in Broadway.  
Café at Broadway Tower Country Park.

**1** Start at the war memorial at the bottom of the grass-fringed High Street and walk eastwards up past the red phone boxes. Continue on past the shops until you reach a sign pointing right, 'activity park & picnic area'.

**2** Follow this path between the avenue of trees with the playground on your left, and pass through the kissing gate at the end. Continue straight across the field, through the kissing gate at the other side, over a small footbridge and through another gate into a 'ridge and furrow' field. Be wary of muddy areas near these gates after wet weather. Continue to follow the direction arrows through two more kissing gates and fields until you reach the road. Watching for traffic, turn left and continue up Snowhill Road until you reach St. Edburgh's Church, parts of which date back to the 11th Century.

**3** Turn left just after the church, through the gateway into Coneygree Lane, named after the medieval 'free' rabbit warren granted here by King Henry III in 1251. Follow the track up hill for just over half a mile.

**4** At the top of the track, turn right and continue on through a 2-in-1 gate, following the path through the field to the house at the top. Follow the track to the right of the house until you reach two field gates.

**5** On reaching a farm gate with two stone gateposts turn left. Through the gate and up the track until you reach Rookery Farm. Keeping the farm buildings on your left, continue straight on up the metalled track until you see a kissing gate on the left. Go through the gate into the grounds of the Rookery Barn Café. Just by the main entrance pass through the tall kissing gate and head on up towards the tower.

**6** You are now at the second highest point in the Cotswolds with its beautiful landscape laid out beneath you, so take a few minutes to soak in the breathtaking views over fields, hills and hedgerows as far as South Wales in the distance. A climb up the tower, a folly built in 1798 for Lady Coventry, is well worth the extra 55 feet - on a clear day you can see 13 counties from the top!

To continue the walk, pass through a second high kissing gate beyond the tower onto the Cotswold Way and turn left down towards a stile. Follow the Cotswold Way signs down the hill for a mile, keeping the wonderful dry-stone wall on your right, and passing over several stone stiles and down one flight of steps. Towards the bottom, the path levels out, continue to follow the signs through two metal kissing gates and over a stream, heading for the houses at the far side of the last field. Pass through two more gates and follow the alley towards the road.

**7** Turn left and continue down the High Street, back towards the memorial at the start. Broadway, the 'Jewel of the Cotswolds', is the perfect place to seek out a pub or café to rest tired feet and to plan your next walk on the Cotswold Way.

Cotswold Way National Trail • Tel: 01451 862000 • Email: [cotswoldway@cotswoldsiaonb.org.uk](mailto:cotswoldway@cotswoldsiaonb.org.uk) • Website: [www.nationaltrail.co.uk](http://www.nationaltrail.co.uk)  
Worcestershire Hub • Tel: 01905 765765 • Email: [countryside@worcestershire.gov.uk](mailto:countryside@worcestershire.gov.uk)

出典：ナショナルトレイルウェブサイト (<http://www.nationaltrail.co.uk/>)

図3 コッツウォルズウォークのコース紹介 pdf

地域住民がウォーカーのために維持管理をしている代表的な装置がゲートである。前述したように、イギリスのフットパスは民有地である牧草地帯を歩くケースが多く、これらの土地では羊や牛が放牧されている。ウォーカーは自由に入ることができる権利を有するが、そのすべてに立ち入ることができるわけでない。基本的には通行可能な歩行エリアが一定の幅で確保されている（写真 10）に過ぎず、家畜に配慮しながら共存している状態である。したがって、このような牧草地に入る際には、家畜を逃がさないため、あるいは野犬などの侵入を防ぐために設置されたバリア（障害物）を通ることになる。このバリアには2種類あり、キッシングゲート（Kissing gate）と呼ばれるもので同時に人間二人が通過することが困難なほど狭い開閉式のゲートと、単に壁などを跨ぐだけのスタイル（Stile）と呼ばれるものがある。これらはいずれも土地所有者が維持管理しているものであり、ウォーカーはルート上に設置された標識から得られる情報とあわせて、この障害物を越えてウォーキングを楽しんでいる。



写真 9 牧草地帯のフットパス



写真 10 牧草地内の歩行可能帯



写真 11 キッシングゲート



写真 12 人が乗り越えるスタイル

#### (4) 経済波及効果

イギリス政府の環境・食糧・農村地域省（Defra : Department for Environment, Food & Rural Affairs）の下部組織であるナチュラル・イングランド（Natural England）<sup>(2)</sup>が行った調査によると、2011年3月から2012年2月までの1年間に、イギリス在住の成人約4,200万人が総計14億1千万回、地方の田園地方を訪れ、このうち、78%にあたる約11億回がウォーキング目的のトリップであった。滞在中、観光客の約26%が何らかの形でお金を落とし、一人が一

回の旅で使った費用の平均は 7.46 ポンド (約 955 円)<sup>(3)</sup>と推計された。これらの数値から、ウォーキングを目的に地方を訪れる人々は年間約 82 億ポンド (1 兆 49 億円)<sup>(3)</sup>のお金を地域に落としている計算となる。ウォーカーが使う費用の大半は飲食代と推定されており、人口が減少し、経済が低迷する地方部においては大きな経済波及効果であると言える。

また、同機関が実施した調査によると、2009 年から 2010 年にかけて地方を訪れた人の 37% が「健康や運動のため」を訪れたのが動機であると答えており、その後 2011 年から 2012 年にはその数が 41%にまであがっている。つまり、健康や運動を目的にウォーキングをする人の数が増加しており、ウォーキングによって市民の健康力が向上し、医療費の削減につながるという観点からも地域にもたらす効果は大きい。

#### (5) ウォーカーを歓迎するネットワーク組織

Walkers are Welcome UK Network (以下: WaWUK と表記) は、比較的小規模の地方自治体が構成員となっている文字通り「歩行者を歓迎する」ことを目的として設立された組織で、イギリス全土に 100 以上の正会員を有する。元々は 2007 年にヘブデンブリッジ (Hebden Bridge) というヨークシャー地方の地方都市で始まった活動である。来街者の減少によって空き店舗が増え、企業が撤退し、さらにそれが人口減少を産むという「負のスパイラル」が蔓延していた街の再活性化にあたり、豊かな自然を活かしたウォーキングを「地域の財産」、そしてそれを目的とする人を「地域活性化のための宝」と認識した。その上で、歩行者のニーズに的確に応えるための広報活動や、フットパスの管理など様々な活動を通じて、歩くために街を訪れる人を官民挙げて歓迎していった。この活動によって来街者は増加し、地域経済にもすぐに成果が表れた。その評価がイギリス全土に広がり、現在では 100 以上の地域が参加する大きなネットワークとなり、会員数も年々増えている。運営資金はメンバーから徴収する年会費に加えて、協賛金や補助金でまかない、収益はウェブサイトの運営費、広告宣伝費、全国レベルのウェブサイトの管理費、パンフレット等の作成費などに充てられている。WaWUK はイギリス全土の愛好家だけでなく、自然環境、観光、交通、健康、福祉など様々な分野の行政機関からもその活動が高く評価されており、ウォーキング産業においては欠かせない存在となっている。

コッツウォルズ地方にある人口約 5 千人弱の小さな街、ウィンチコム (Winchcombe) も、ヘブデンブリッジと同様に世界的金融不安の煽りを受け、地域経済が疲弊していた。中心市街地には多くの空き店舗が見られ、観光客の数も伸び悩んでいた。2007 年に近くを通るコッツウォルズウェイがナショナルトレイルに認定を受けたことから、町では歩く人のための施策に取り組むことを決意し、補助金を組んで実行委員会を立ち上げ、2009 年に WaWUK から認証を受けた。これまでにウォーカーのための地図<sup>(6)</sup>の発行、ウェブサイトによるアクセス情報や飲食・宿泊関連情報の提供、ボランティアグループとの連携によるコース維持管理など、ウォーカーを歓迎するための様々な施策に取り組んできた。その結果、例えばあるホテルの稼働率は WaWUK に加盟する前の 2 倍に増え、観光客は 30%以上増加したという成果が出た。初めは疑心暗鬼であった町当局や議会も、多くの歩行者が訪れ、その成果が目に見えて顕著になってきたことを評価し、そのさらなる活性化に向けて関連施策を推進している。毎年 5 月には全英から



集客する大きなウォーキングイベントを3日間にわたって開催するなど、現在ではウォーキング観光がウィンチユムの主要産業としてこの地域の中心的な役割を果たしている。

以上、WaWUKの活動を概説したが、この活動が評価されるべき点は、推進役が行政にとどまらず、あるいはNPOなど一部の専門家集団に偏っていないことである。ウィンチユムでは、行政、宿泊施設、商業施設など直接ウォーカーから利益を得るであろう団体のみならず、歩行ルートに関わる地主や農家、その維持管理に携わる地元のウォーキング愛好家やボランティアグループ、さらには何かトラブルがあった際に手助けとなる病院施設、保険屋など様々な関係団体と連携して活動が執り行われている。そしてそこには応分の負担金が発生していることも特筆される。例えば地域の商店は一定の年会費を負担している。会員となれば写真13、14に示すような「ウォーカーを歓迎する」という趣旨が示されたステッカーが配布され、店頭に掲示することができる。会費だけ払い、それに見合う収益があるわけではないが他地域から歩きに来た人はそのステッカーを見て、気軽にお店に立ち寄り、そこでお土産品を購入し、飲食し、トイレを拝借し、時には店主とのコミュニケーションを楽しんでから次のウォーキングステージへと移動していく。まさに地域のホスピタリティを感じることができる空間がフットパス上だけでなく、地域全体に広がっているのである。このような包括的に歓迎する仕組みこそが、WaWUKが目指しているものであり、その心が多くの来訪者を虜にして、惹きつけているのである。



写真13 歩行者を歓迎するステッカー



写真14 WaWの統一ロゴを用いたステッカー

### 3. 中間市のフットパス施策展開から見えてくる課題

#### (1) フットパスに関する取り組みの経緯

中間市は北九州市に隣接する人口約4万3千人の都市である。戦後は石炭産業とともに発展したが、近年は他の地方都市と同様、人口減少や少子高齢化に伴う都市の停滞化に直面している。北九州市立大学では中間市と共同で、平成23年度から「中間市文化財の現状調査及び活用・観光方策に関する調査研究」<sup>7)8)</sup>に取り組んできた。同報告書の中で、地域の貴重な資源は今後の中間市における観光振興やレクリエーション振興などで重要な役割を果たす素材であるという認識に立ち、これらを活かした観光振興方策の一手法としてフットパスの提案を行った。具体的には、中間市に残っている昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと

ができる道（素材）をつなげて、地域の歴史的・文化的資源を学びながら歩くコースとして、「街なかの遺産を巡るコース」「底井野の田園風景を楽しむコース」「川の歴史を偲び、川を眺める視点場を巡るコース」の3つを提案した（図4）。

この提案を受けて、中間市と北九州市立大学は平成26年度から協働して本格的にフットパス施策に取り組むこととなり、ファーストステップとして川西の底井野地区での検討を始めた。市役所側は観光推進に取り組む世界遺産登録推進室から職員が参加し、北九州市立大学側は地域共生教育センターの一プロジェクトとして位置づけられ、地域創生学群及び経済学部の学生有志が参加した。プロジェクトでは、現地に入って実際の候補ルートを歩き、地元の自治会等にも声を掛けながら、ルートを作成していった。5月には第1回モニターツアーを開催し、フットパスに関心のある人が県内外から約100名近く散策し、意見交換を行った。その意見を踏まえてさらにコースの見直しを行い、フットパスコースの認定機関である「フットパスネットワーク九州」（以下FNQと表記）へ申請を行い、11月に「底井野なつかしコース」として仮認定（図5）を受けた。この仮認定コースのお披露目を兼ねて平成26年11月9日に「秋のモニターツアー」を実施した。ツアーでは、月瀬八幡宮で宮司さんの講話を聞きながらの休憩、地元の方のレシピを学生達が再現した蒸しパンの試食、地域のボランティアグループによる地域の食材で作ったおにぎりやお総菜を使った昼食の提供など、フットパスの醍醐味である地域の方々によるおもてなしを実現することができ、参加者からも大きな評価を得ることができた。

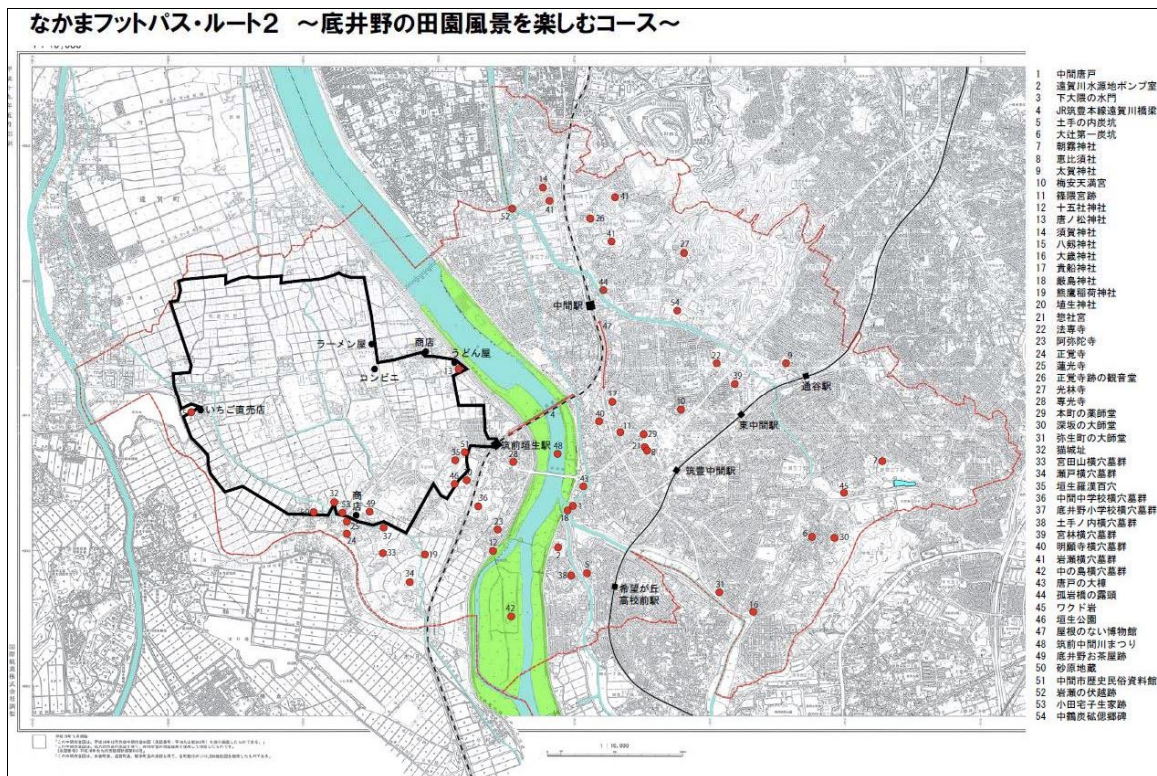


図4 当初提案した川西地区のコース（底井野の田園風景を楽しむコース）



図5 FNGから仮認定を受けた「底井野なつかしコース」



写真15 月瀬八幡宮での休憩



写真16 なごみ工房による昼食の提供

## (2) 市民への認知度向上

歴史的街並みを散策するような街歩きや健康のためのハイキングなどと異なり、フットパスは住民によるおもてなしを参加者が感じながら、お互いが交流し、その化学反応によって地域が活性化するというプロセスが必須である。そのためには地域住民の理解及び協力が不可欠であり、いかに地域住民にフットパスの周知を図っていくかが推進団体として第一に求められる。中間市での取り組みにおいては、まずこの点を重視し、底井野地区での検討においては、学生達が丁寧に地域の一軒一軒の住宅を訪ね歩くこととなった。同地区に新しくできた「中間市地

域交流センター」に関するアンケート調査を行うという目的で各住宅を訪問し、地域住民の利用実態や施設の評価を把握するためのやり取りする中で、フットパスの話も合わせて行うという手法を取った。結果的には学生達が何回も現地に足を運ぶこととなり、地域の住民の方にも大学生が中心となってフットパスの取り組みを始めたという趣旨を十分に伝えることができたと評価できる。2回実施したモニターツアーにおいても、地域住民の協力の下、事前の清掃活動、休憩場所の提供、お茶や軽食の提供など、地域の方々に様々な形で携わってもらうことができた。

また、全市的には広報なかまの平成 26 年 12 月 10 日号にフットパス特集が掲載され、1 年間にわたる活動、熊本県美里町での先進的な取り組み、北九州市立大学教員によるフットパスの意義などが紹介された。同広報誌の発行以後、街を歩いていると市民の方々から「フットパスですか?」と話しかけられることもあり、徐々にではあるが市民への認知度の高まりを感じることができた。今後も、フットパスイベントの開催、SNS 等による発信、講演活動などを通じてフットパスの周知を高めていく様々な施策を推進していくことが課題である。

**何もないは語れない**

**Interview**

学生のみなさんは、楽しみながら地域を歩くことができてきました。そこで笑っていたことは、私たちがとても気持ちいいことでも、外から来た人には難しめに感じられるものがあるという事です。多くの人の交流が生まれるフットパスは、地域を知ってもらう機会にもなるので嬉しいという声も聞かれます。今後とも住民のみなさんにフットパスを広く浸透させていきたいです。

吉永 純志 さん  
(下大園自治会長)

**住居近郊のフットパス**

フットパスは、観光のために断たに何かを作ろうという意識がありません。黄金色の小糸や田園風景、川に泳ぐ魚など、都市部の人たちに比べて豊かな自然が溢れていて、小さな楽しみを積み重ねていくことがフットパスの楽しみ方です。

このように、フットパスは「参加者が自分自身を楽しみ見つけることができる」というのが、活動の大きな特徴です。フットパスに参加する人が、ま

1 コース作りやイベントの企画など、何事も協議を重ねる学生のみなさん。2-3 地域の人がからげの長所や地域のことを教えてもらえるフットパスの楽しみの一つ。4 イベントの立ち上げを命題として進める。5 なごみ園のみなさんとイベント用の物資を準備。6 自分たちから参加者の募集です。7 農業の人から採れたのキャベツをいただきました。

**Interview**

「住居が主役になれる」「参加者が能動的に楽しむ」という2つの条件を持つフットパスを行政が観光政策の柱として行っていることは、全国的にも珍しいことです。住居が主役になるための仕組み作りを行ってほしいです。本業の認知度が高いとはいえず、中園市を認める人たちがいるのが今後重要になってきます。みなさんには、「笑顔」と「声掛け」をお願いします。

廣川 祐司 さん  
(北九州市立大学環境学部長)

**主役は地域に住む人たち**

北九州市立大学の協力を得て、座井野地区でモデルコースを策定中。コース作りには地域の人たちの協力が不可欠です。人々とはつくづく仕組みがあるフットパス。必要なのは地域のみなさんのおもてなしの心なのです。

座井野地区は自然を感じてきた地域のみなさんが、目を惹かれるように受け入れてくれたことでも嬉しかったです。そのとき私たちの活動が浸透している実感することができました。よその地域では、フットパスで訪れる人のおもてなしをすることを生かしていける人もいます。中園市に歩きたる人をおもてなしの心で迎えるようにしていきたいです。

矢ヶ井 那津 さん  
(北九州市立大学環境学部長)

9 Nakama City Public Relations

広報なかま 12月10日号 8

図 6 「広報なかま」で組まれたフットパス特集

#### 4. 市街地型フットパスの可能性と展望

フットパスの発祥は見渡す限りの牧草地、丘陵地帯が広がるイギリスの田園地帯である。日本でも先進地と呼ばれているのは、多摩丘陵の台地の中に昔ながらの里山風景、雑木林、田畑など多くの自然が残されている東京都町田市、ブナ林の北限地である黒松内町や大雪山系の麓

に大自然が広がる上富良野町など北海道の数多くの市町村、棚田の風景や古くからの石橋が多く残されている熊本県美里町など、自然のままに残された「ありのままの風景」を感じることができる自治体である。これらの美しい自然風景が人々を魅了し、四季折々のタイミングでウォーカーを引き寄せている。では、フットパス施策を展開するには、このような自然環境に恵まれた条件が必要なのか。一般的な住宅地が広がる市街地ではフットパスの導入は無理なのかについて考えていきたい。結論から言うと「フットパスは市街地型でも適用可能である」という仮説を唱え、その実現を可能にするための方策を以下に提示する。

### (1) 地域住民が主体となったフットパス推進

フットパスは「森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことができる小径」と定義付けられる。フットパスと名の付く施策を行っているところの多くは他の地域にはない、あるいは特徴的な自然風景を売りにしており、その風景を楽しむに多くのウォーカーが訪ねている。ただし、必ずしも自然風景を楽しむ事ができるのが条件になっているわけでない。むしろ、フットパスの醍醐味は地域の方のおもてなしを享受し、地域の方々とのコミュニケーションを楽しむことである。そのおもてなしがあるからこそ、ウォーカーの再訪意欲が高まり、地域にとってはより多くの人を訪れることでより多くの経済効果が期待できる。固有の自然風景がなければ、そこにある都市的風景をつなげたフットパスコースを提案すればよい。市街地の中にも非日常的な楽しみをすることができる地域資源は存在する。そもそも自然的な風景を中心としたフットパスを楽しむ人は多くが都市住民であり、その逆もまた真である。自然的な風景の中で暮らしている人にとっては、都市的な楽しみ方をするフットパスがあってもよい。

そのためにはフットパスコースを策定していく中で、地域住民が主体となって取り組んでいくプロセスが求められる。特に市街地の中の地域資源というものは地元の人でないと知り得ないものも多く、またその価値を伝えていけるのも地元の人にしかできない。

中間市では平成 24 年度に「観光・歴史ボランティア養成講座」を実施し、合計 9 名の市民が参加した。この参加者が中心となって、中間市の市街地において新たにフットパスコースを策定するワークショップを平成 27 年 3 月から取り組み始めた。このコースは「九州・山口の近代化産業遺産群」としてユネスコ世界遺産登録を目指している「八幡製鐵所遠賀川水源地ポンプ室」を目玉として、遠賀川の川東地区を巡るもので、ルートのほとんどが市街地内を通るものと想定されている。彼らは世界遺産登録決定後に観光ボランティアガイドとして活躍していくことが予定されているが、ただ単に中間市の案内人としての役割にとどまらず、フットパス施策の推進役として、コースの策定からその後の運営に至るプロセス全体で活躍することが期待されている。またワークショップには受講生だけでなく、広報なかまのフットパス特集を見て、フットパスに興味を持ったことで参加することになった一般市民もいる。今までは全くまちづくりには興味も縁も無かった人が、フットパスの魅力に取り憑かれてその運営に携わるという事自体が大きな進展であり、彼らの地域に対する知識や情熱が市街地型のフットパス成功に導いてくれるものと期待される。

## (2) 市街地ならではの文脈を活かしたルートづくり

中間市は遠賀川を挟んで対照的な光景が広がっている。最初に認定コースを策定した川西地区では広大な田園地帯を見ることができるが、川東地区は高度経済成長期に北九州市のベッドタウンとして発展した経緯があり、現在ではほとんどが住宅市街地となっており、典型的なロードサイド型の商業施設が建ち並んでいる。つまり、日本中どこにでもある都市景観が広がるだけの平凡な住宅市街地とも言える。このような条件下でもフットパス施策は可能なのかという問いに対して、明確に断言はできないが、それでも十分に適用可能性の素地はあると考えている。その根拠の1点目は、市街地には歴史的な文脈が自然的土地利用をされている場所よりもより多く備わっているという点である。中間市の例で言うと、市街地を江戸時代に石炭を運搬するために掘られた人工河川・堀川が通り抜け、関連する遺構として中間唐戸や唐戸の大樟などの歴史的資産を見ることができる。また、戦後の炭鉱全盛期を偲ぶことができる旧国鉄香月線跡や引き込み線などの線路跡も数多い。このような自然的土地利用の空間にはない素材を有しているのも市街地の特徴である。2点目の根拠は1点目とは逆の発想となるが、元々、城下町以外の市街地は江戸時代までは自然であったところが多く、そこには必ず何らかの自然的文脈が隠されているということである。昔からあるありのままの風景とは、自然に形成されたものではなく、地域の方々の長年にわたる生業から産み出されたものであり、風土に根ざした伝統的な生活スタイル、土地への愛着などの結果として生み出され、維持・管理されてきたものである。このようなストーリーをコースに組み立てていくことができれば、市街地内でも十分にフットパスコースとして成立すると考えられる。

## (3) ウォーカーを歓迎する地域主体の仕組みの構築

何回も指摘しているようにフットパスの醍醐味は地域との交流にある。それが第一義と言っても過言ではない。市街地でフットパスを推進していく上で最も望ましいメリットは、市街地内には潜在的に様々なおもてなしの可能性が存在しているということである。特にフットパスコースとして欠かせない休憩のための飲食店やトイレなどは集落部と比較してより多くの施設が市街地には立地している。訪れたウォーカーがより多くのお金を落とすための素地が既に備わっている条件を見逃さない手はない。そのためにもフットパスコースを維持管理する組織とは別に、商工会議所や青年会議所など地域経済界が主体となって「ウォーカーを歓迎する」ための組織を構築し、ウォーカーへ働きかけていくことが求められる。ただ単にフットパスコースを示した地図上に施設の位置を表示するだけでなく、フットパスを活用した商品提供やフットパス参加者への優遇施策などによってウォーカーを訴求していくことで、衰退している地方都市の地域活性化にもつながることが期待される。イギリスのWaWUKでやられているような受け入れる側の商店、飲食店、宿泊施設などが会費を負担し、その運営資金でフットパスの施策を支援するような体制づくりができれば、前述した市民組織との協働によってその施策推進がより効果的となり、市街地型のフットパスがより成功へと近づくであろう。

## 5. まとめ

本研究では、イギリスの先進的な事例から、フットパスコースを維持する様々な仕掛けを地域全体で管理している現状を紹介するとともに、ウォーカーを歓迎する官民あげた組織によって地方小都市においても地域経済に大きな波及効果を産み出していることを指摘した。このようなウォーカーを歓迎する組織の様々な分野に至る広がり、フットパス施策には欠かせないことが明らかとなり、今後、我が国でもその体制化に向けて検討していくことが不可欠であると言える。次いで、中間市でのフットパス施策の検討の経緯を整理し、市民への更なる周知の必要性や情報発信手法のあり方、地域住民の関与をいかに広げていくかという課題を指摘した。さらに、中間市が抱えている現状を踏まえて、市街地におけるフットパスの可能性について検証した。そもそも市街地には多くの地域住民が居住しており、地域の人しか知り得ない様々な資源を発掘できるのも地域住民であり、地域と一体となったコース策定に真摯に取り組むことで、市街地においてもフットパス施策の推進が可能であることを指摘した。また市街地が持つ潜在的なポテンシャルとして歴史的な文脈、自然的文脈を活かしたコースづくりの必要性、さらには市街地ならではの商店、飲食店などが主体となってウォーカーを歓迎する組織の必要性を指摘し、これらの複合的な取り組みによって市街地型のフットパス施策の可能性を肯定的に捉えた。これらの検証は中間市にとどまるものではなく、豊かな自然にすら恵まれていない、都市的土地利用が中心となっている我が国の多くの市街地でも適用可能な発想である。今後、フットパスの先進自治体と言われているような都市にはない、新たな方向性として、どこにもある、しかしながらその都市にしかない固有の文脈を探る「市街地型フットパス」の展開が広がっていくことを期待する。そのためにも、このような市街地におけるより効果的なフットパスの推進手法をより明確に明らかにしていくことが今後の課題である。

## 参考文献

- 1) 「フットパス・シンポジウム 2013in 町田」でのシーラ・タルボット女史（英国ウォーカーズ・アー・ウェルカムタウン協会理事）による特別講演（2013年5月25日・町田市生涯学習センター）から
- 2) 内田晃「地方都市におけるフットパス導入による地域活性化の検討と課題」2013年度北九州市立大学都市政策研究所地域課題研究報告書，平成26年3月，pp. 39-58
- 3) 廣川祐司「地域活性化のツールとしてのフットパス観光 ―公共性を有した地域空間のオープンアクセス化を目指して―」2013年度北九州市立大学都市政策研究所地域課題研究報告書，平成26年3月，pp. 59-75
- 4) Sheila Talbot「フットパスから“Walkers are Welcome Town”へ英国での展開」里山学研究センター2013年度年次報告書，平成26年3月，pp. 28-39
- 5) ナショナルトレイルウェブサイト (<http://www.nationaltrail.co.uk/>)
- 6) Robert Talbot「Winchcombe Way, The official guide」(2014), North Cotswold Walkers
- 7) 中間市文化財の現状調査及び活用・観光方策に関する調査研究報告書，北九州市立大学都市政策研究所，平成24年3月

- 8) 中間市の川にまつわる地域資源を活かした活性化方策に関する調査研究報告書, 北九州市立大学都市政策研究所, 平成 25 年 3 月

#### 補注

- (1) このコースを最短で駆け抜けた記録は Mark Townsend 氏が 2013 年に記録した 14 日 14 時間 44 分である。
- (2) ナチュラル・イングランド (Natural England) は自然環境に関する政府アドバイザーとして位置付けられ、イングランドの自然保護を目的として、科学に基づいた実践的助言などを行う機関である。
- (3) 1 ポンド=128 円で換算 (2012 年 2 月の TTS 平均レートは 1 ポンド=127.83 円)